

水引

〔尺素往來〕爲室内之飾、○中 打敷、水引、胡銅、鑰石、

〔安齋隨筆 前編五〕一水引

佛前ニ金網などを門字ノ形にかけを水引と云、建武元年八月廿七

日東寺塔供養記に、地鋪水引等依無之、自他所被渡之、野水抄と見へたり、貞丈按、佛前ノ水引ハ、御

厨子引ツシヒキの略語なるべし、俗に佛龕を厨子といふ、厨子の前に引くゆへ御厨引と云なるべし、或説

に佛前の水引には帽額ぼうがくの二字を用ゆべしと云、按に、非なり、簾ノ帽額も、獸形帽額も、上に一文字

に張て、其餘り左右に垂れず、水引と異なり、

〔類聚名物考 調度五〕みづひき 水引

禪林小歌注、其前多立卓、金網打敷、以金帛交糸織金紗水引、今按に、水引とは世に云傳ふるは、天井よりた

る、故に水引と云とぞ、此名古へ見えず、もとは帽額ぼうがくもかうと云たるもの是也、御簾のもかうと

いへるも是也、後に水引と云名は出たり、又古へ水引の糸などいへるは異事にて、一名にして別

物なり、

〔貞丈雜記家作十四〕一床飾に水引敷絹と云ふ事、○中 水引の絹は床の左右の柱より降る絹なり、上を

天の罽と云ふ婚禮又は具足著の時など、床飾に用ふるなり、貞丈按するに、此の事古儀也、床の上

是れ本名なり、

